



2017年10月15日 発行

2017年秋号

<第40号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/池田直樹 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881

—特集—

就労継続支援B型事業所 ワークス集

私のくらし

グループホームで生活しています。朝は起きるのが辛いけど自分のペースでいいから水分補給をしながら頑張って掃除の仕事へ行っています。朝は8時半から夕方3時半までおわりますけど。

グループホームの部屋に着いたらもうボタンキューになっちゃいますので大変かもしれないけど自分の生活の為に働いていますので。土日祝は実家へ帰ってお母さんと一緒に買い物に行ったりは荷物を持ってあげたり、食事の片づけをしたりヘルパーさんと一緒に個人活動に行ったり、もうじき一泊旅行へ行くのが近づいてきましたので。

休まないように気をつけて実家にいるお母さん、妹も応援してくれているし事務室で応援して下さったり悩みあった時はすぐに職員の人に相談ののって貰ったり自分に負けないように自分のペースで頑張ってます。

小西 正美

働くことにこだわる ワークス集

「ワークス集(以下、集)」は、平成25年10月に「ワークス翔」と分離し、定員40名の大所帯から定員20名の小集団に変わり、それまでの雰囲気と随分変わってききました。少人数になったことで、事業所内での混雑が軽減され、空間にゆとりが出来たことで、作業に集中できる時間が長くなりました。そんな中、利用者さんは元気で活気があり、毎日作業に励んでいます。

元鉄工所だった建物の1階では、建築用のボルトにナットを巻き、組み合わせしていく作業をしています。開所当時から行われている作業で、利用者さんには馴染みの作業です。部材には、大小のサイズ、油が付いているもの、すべりのないものなど種類があります。巻きにくいボルトの場合、溝とナットをなじませる為、「カチツカチツ」とボルトとナットの組み合わせ部分

を別のボルトを使って叩きます。その音が聞こえてくる時は、巻きにくいボルトだと分かります。2階では、工業用ブラシとなる金属の線を指定の重さに計量します。とても細かい線があり、加減が必要な時もあります。計量を終えた線を束ねる際に木のヘラを使って、「トントン」と慣れた手つきで揃える姿はまるで職人のようです。他にカーテンレールの組立をしています。磁石、コマを付けるなど、いくつかの工程があるので、この作業を好む利用者さんがいます。これまで集では様々な作業をしてきましたが、現在はこの3つの作業をしています。

返ってきます。日によっては、ペースが上がらない日もありますが、作業そのものを投げ出すことはありません。開所当時から、集では働くことを大事に考えています。毎日の終礼時に、その日の出来高を確認し、工賃目標金額を決め、その達成に向けて頑張っていました。数年前、利用者さんが中年にさしかかり、体力面や健康面で不安を抱える人が増えたことに配慮をして、支援者が動くことが多くなり、利用者さんは作業テーブルで座って作業するだけの状況が出てきました。準備や検品など概ねを支援者が行うことで、効率が上がりましたが、利用者の維持にはなりませんが、利用者主体は薄れた感じになりました。

返ってきた。最初の頃には、「最近はいないなかつたのになんで」と利用者さんから声が上がりが、支援者としては、変えないほうがいいのかな?と考えることもありました。それでも、何人か一緒に部材を運び、力のない利用者さんにはテーブルの上の掃除やダンボール潰し等、それぞれが役割を持って動くように考えてきました。最近では不満を聞くどころか、積極的に準備し、自分たちで作業をまわそうとする気持ちも伝わってきます。作業種類の切り替え時には「それはこっち」「ここにあるよ」という会話が聞こえ、座ったまま動いていない利用者さんに「座ってんと動きや」と利用者さん同士が声をかけ合います。お互いに声をかけることで自発的にされる様子が見られ、作業場内には活気が漲ります。

年月を重ねる毎に、利用者さんの作業ペース、出来ること、役割は、変化していくと思います。もしかすると、長年慣れ親しんだボルトの作業も、出来ない日が来るかもしれません。しかし、利用者さんの、集で長く一緒に働きたい、という思いは変わりません。バリバリ働きたい、ゆつくり働きたい等、働き方は個々に違いますが、それぞれの存在を認め合い、共に働いています。そして、働くことに喜びを感じ、社会の一員としてのプライドを持っていきます。これからも、利用者さんの思いを大切に、働くことにこだわり続けたいと思います。(野崎)

集の皆さんは、作業に取り組み姿勢が前向きで真面目です。急ぎの仕事が入った時には、「頑張ろう」と声をかけると「オーッ」と声が

奥村さん ありがとう



平成29年6月13日、サンリットを利用されていた奥村健司さんが急逝されました。39歳という若さで旅立たれてしまった奥村さんを偲んで、ここに、感謝の想いを残したいと思います。

奥村さんといえば、会うと「しんちゃーん」とニコニコと話しかけてくれる姿が脳裏に焼き付いています。ふうせんバレーや余暇活動の出発前には、競馬の話や野球の話、テレビの話などいろいろなことを話して過ごしました。ふうせんバレーの試合では、普段とは違う鋭い眼差しでふうせんを追いかけていた姿が、とても印象に残っています。

ある大会で、奥村さんのアタックが決まらず、決勝で負けてしまった時、ひとり悔しそうに歩く背中が「これ以上に強くない」といけないうと支援者が気を引き締めるきっかけになりました。先日の大阪大会では、メンバー全員が、「入

院している奥村さんの分まで頑張つて、絶対に優勝する！」という気持ちが出たのか、優勝することが出来た。しかし、その報告が出来ないまま旅立たれたことが非常に心残りです。これまで、仕事・余暇・クラブ活動と毎日多忙な暮らしをされていた奥村さん、ゆつくりとお休みください。これまで、ありがとうございます。

(高橋慎)

サンリットでもいつも明るく皆とけい馬の話とか野球の話とかをしてましたね。瀬口先生のダンスもいつも楽しそうにしましたね。その明るい顔ももう見れないのは、とてもさびしいです。

(佐藤歩)

ふうせんバレーでは一緒にチームでアタッカーをこたうたいでした。試合になると、おっくんの方がよくアタックを決めていたので、しつとしたことがあります。ダンスでは、おっくんが亡くなつてポジションを変えると言われたときに、おっくんのポジションを空けたい欲しいつて言ったよ。まだ、発表会のときに踊りに来てくれそうやと思つたから。

(榎原みゆき)

いつも奥村さんとお会いすると、はにかんだ笑顔で「最近どう？」と話しかけてくれました。ご両親思い

で、お父様が「本当に優しい子だった」とおっしゃっていたように、いつも穏やかな口調と優しい表情でした。奥村さんの通夜・告別式は家族葬という形で行われましたが、通夜には会場に入らないほど多くの方が参列され、改めて奥村さんのお人柄を感じました。

所属していたダンスクラブでのダンサー名は「ケン」。

自分の踊りに少し自信がなく、おどおど踊っていると、先生からの激が飛びます。「ケン、しつかり前向いてー」「え？え？」と戸惑いながらも毎回一生懸命練習に取り組み、発表会で踊る姿は堂々としていました。

今年も11月に発表会があります。チーム内では「ケンちゃん、踊りに来てくれるやろな」「うん、一緒に踊るでー」と話しています。

誰とでも打ち解けられ、皆から愛された奥村さん。これからもずっと、仲間の中の中心に生きていきます。

(野々村)

奥村さんとは歩がまだ玉造にあつたときに一緒に働きました。お仕事のほかにもGH旅行やダンスの活動などでも一緒に楽しみました。奥村さんはいろいろなことを知っていて、お話しするのが楽しかったです。天国から私たちのことを見守ってくださいね。安らかに眠りください。

(南野ゆかり)

おっくんとは長いつきあいでした。アスクから仲良くなつて、ふうせんバレーとダンスも一緒に、個人でも遊ぶようになりました。おっくんとはよく二人で遊びに行つたあと、一緒にお茶をしたりしました。二人でボケつつこみをしたたりしてじゃれあつていました。これからもずっと遊んだり、ユニオンで老後までつきあつていきたかった。また何十年後くらいに天国と一緒に遊びましょう。

(伊東由夏)



いた矢先に、その様な書類はないといわれていた「確認済書」を家主さんが見つけてくれた。

元々パークハイツについて「居宅介護」を活用しての支援を組み立てた理由は、「確認済書」がないので障害福祉サービス用の建物として行政に認めて貰えないための判断だった。

これを期に、一階と、九階の使用用途を変更し年度後半より、利用者が国よりの家賃補助も受けられる「グループホーム」として運営することに決めた。

私の理想とする生活支援は、今まで通りの「まかな」と支援を備えた一人暮らしだ。

国は、グループホーム(共生生活援助)は、障害のある人の共同生活の場と規定しているが、私たちは「十派一絡げ」ではなく、一人ひとりに寄り添った支援を展開したい。

職員紹介

青木 江三子 (ちいめん)

ユニオンに入職して約1年半が経ちました。

毎日、利用者さんと関わる中で、喜ぶ顔が見られた時は、とても幸せな気持ちになります。これからも、利用者さんと寄り添い、その人らしい暮らしを大切にしたいと考えています。

趣味は、海外からの観光客をボランティアでガイドする事。月に1度ほど大阪・奈良・京都等で案内しています。英語が堪能な彼女は、ユニオンに来る前は、学校の先生をしていたと照

れながら話してくれました。また、スピリチュアルスポット巡りや怖い話も好きで、聞かせてくれる人を現在、絶賛募集中です。

仙頭 兼代 (ちいめん)

高齢者施設、放課後デイでの経験を経て、今年の7月に入職。放課後デイでは障がいのある児童と多く関わり、「ユニオンの利用者さんを見て、あの子たちが大人になったらこんな風になるのかなと、未来の姿をイメージすることが出来ました」と子供たちの面影を思い出しながら話してくれました。

どんな支援者になりたいか聞くと「利用者さんの役に立ちたいです」と真摯な瞳で語った彼女。

最近、映画「関ヶ原」を観に行き、石田三成にハマりました。一般的には悪者とされている彼ですが、男らしくカッコイイ姿を見て、とても好きになったそうです。(島村・原)

編集後記

▼「障がいとはなんぞや。」この言葉は私が大学在学中に教授が学生達に問いかけた言葉である。▼学生時代の私にはとても難しい質問だと思ひ、明確な回答は思いつかなかった。▼初めて知的な障がいがある方と接し、障がいとは「障がいを持つことである。」と考えた。

しかし、時が経つにつれて障がいとは「強い個性を持っていることである。」と変わっていった。▼彼らと接するなかで、こうなつて欲しいと支援者側の一方的な考えがあり、私が何とかしないといけないと思ひ、空回りすることが多くあった。

▼私たち支援者が行う支援とは、彼らが抱えている課題を彼らに寄り添って、一緒に解決していくことだと今は考えている。▼まだ私自身が思う回答は見つかってはいないが、これからは彼らと共に考えながら接していきたい。

(K)